明・清時代教界の展望

―寺刹の復興をめぐって―

長谷部幽蹊

序

明・清時代は、禅の研究者にとって必ずしも魅力のある時期とは言い難いのであり、従来ほとんど顧みられることがなかったといってよい。確かに明代は教学、実践面ではとりたてていうべきものはないかもしれないが、世俗化した形における仏教信仰は却って盛んで、居士をはじめとして民衆に迎えられ広く滲透したとみられている。[註1] ただそれに関連した史実を列挙し、具体的に例証することにはかなり困難を伴うが、寺刹の復興や僧道の増加[註2]、戒律面の重視などは[註3]、像法あるいは末法の時代に似つかわしい現象の一端であるといえるであろう。

仏教史の、特に通史類の記述をみると、元代以降は概ね簡略で、一括して論ぜられるのが通例であり[註4]、その点は中国史研究一般についても同様である。ただこの方面では、最近「明代史研究」の創刊をみた。一時代だけに限定した専門誌は他に例が少く、その意味でも貴重である。また特殊な研究書も逐次公けにされ[註5]、隆盛に向う兆候が見えるのは喜ばしい。

禅宗史の分野では敦煌文書の出土以後、南北朝から唐代にかけての資料批判的研究が脚光を浴び、汗牛充棟もただならぬと形容されても、さして誇張とは思われぬほど、多くの著書や論文が相次いで公表され、従来の定説を覆すような画期的研究成果が挙げられているのに比すれば、明・清以降禅の研究は誠に寥々たるものであるといわざるを得ない。

かつて忽滑谷快天博士が『禅学思想史』の大著を公刊され、その中で、元以降を「禅道変衰の代」として特色づけられた。増永霊鳳博士の『禅定思想史』においても、元から清の乾隆に至る約四百五十年間を衰頽時代とみなし、九頁ほどに圧縮して簡潔に論述しておられる。このように元以降を衰頽の時期とするのが大方の評価のようで、それがわれわれにこの時代の研究に手を初めるのを躊躇させる一因ともなっているのであるが、いまは暫くそうした価値判断は差し控えて、ただ事実の客観的な叙述を期して研究を進めたい。

この小論は明・清禅宗史の研究を手がけるに先立って、まず両代の教団の実態を把握しておく必要を感じ、備忘として録したものをまとめたものであり、全体として、明・清禅宗史研究の序説としたいと考えている。

註1　平凡社『東洋中世史』四、三八二頁に『五雑俎』八巻の「上は王公より下は婦女に至るまで、毎に禅を談じ仏を拝し、喜びの色溢る」の文を引いている。

註2　明初には府州県の僧道教が、それぞれ四十、三十、二十と規定され、所轄官署の監督をうけたが、次第に禁が緩み中期に至って僧道は総数五十万にも上ったという。有斐閣『東洋中世史』三四六頁、道端良秀『概説支那仏教史』二五〇頁。

註3　戒儀の行修は盛んであったようであるが、形式面の整備に終始した嫌いがないでもない。

註4　古くは境野哲氏が『支那仏教史綱』に元以降を六十数頁にまとめられ、比較的詳細で、記述が全体に亘っている孤峰智璨師の『禅宗史』でも元代以降については約四十頁を割いておられるに過ぎない。平楽寺書店刊『仏教史概説』法蔵館『概説支那（中国）仏教史』等は全体の比率からみるとかなり多くの紙数が当てられており、蔣維喬『中国仏教史』はこの時代について比較的詳しい。釈東初『中国近代仏教史』は、元・明については簡略であるが、清以降に関しては多方面に亘り詳述されている。近刊の書に張聖厳『明末中国仏教の研究』があり、やや古く、水野梅暁著『支那仏教近世史の研究』がある。他に金山正好『東亜仏教史』（二十二—四十章）道端良秀『概説支那仏教史』（二十五—二十七章）王治心『支那宗教思想史』（二六九頁以下、但し明以降については基督教が主となっている）陶希正『明代宗教』などがある。

註5　創刊号は一九七四年三月、第二号が一九七五年三月に汲古書院から出た。
明代に関しては星斌夫『明清時代交通史の研究』荒木見悟

『明代思想研究』、清代については三田村泰助『清朝前史の研究』、重田徳『清代社会経済史の研究』、安部健夫『清代史の研究』など比較的最近の刊行に属する秀れた特殊研究の労作として挙げられよう。

一　元末仏寺の罹災と復旧状況

元朝末期には、綱紀益々紊乱し、財政上の破綻を繕わんと、過重な税や賦役を課し、紙幣が濫発されたことなどによって、社会不安が増大し、加えて河水が氾濫し、天災飢饉が相次いで起こり、多数の流民の発生を見ることとなり、至元から至正年間にかけて、各地に叛乱が頻発したが、それはやがて流賊の騒擾の域を超え、大規模な組織的革命運動へと発展し、豪強が峰起し、国を建てて王を潜称する者が続出するに至った。叛乱の地域は広東、広西、河南、四川、山東、河北、江西、福建、湖南、江蘇、浙江、山西、遼東と、中国本土の大半以上に跨がり、徐寿輝の蹶起によって安徽、湖北までも捲き込んだのである。[註1] こうした大小の争乱によって、在地の仏寺道観等も戦火の被害を免れ得なかったと考えられる。[註2] いま通志が記載するところに基いて、江西、浙江、福建三省を例にとり、罹災状況を調査してみると次の如くである。（表(一)(二)(三)参照）ただこれら地志の記述が省によって繁簡区々で、叙述の体裁も若干異っているため、画一的な統計処理は不可解であるが、少くとも概況は別表の数字によって把握することができよう。

まず浙江省内の元末における仏寺の罹災状況をみるに、交通の要衝に当る、同時に軍事上の拠点としても重要な杭州の周辺が最も被害が大きく、比率の上では新城県の五ケ寺中四ケ寺が高率を示し、宋末、元軍の猛攻で大打撃を蒙った臨安、さらに余杭、仁和城外、銭塘仁和附郭、銭塘城外、富陽県などがこれに次いでいる。仏寺が密集していても、天台、臨海城外などは、殆んど戦火を蒙っていないかにみえる。これ等被災寺刹のうちでは、明代に入って、洪武年中に、重建重修の成ったものが大部分を占め、計四十三ケ寺に上っている。

江西省内にも、元末に戦火に遇って壊滅した仏寺は数多くあるが、特に局部的には甚大な被害を蒙っているようである。例えば浮梁県の如きは十五ケ寺中、実に十三ケ寺が罹災し、徳安県は十九ケ寺中十七、安仁県の十七ケ寺中十三など全滅に近く、徳化県も二十八ケ寺中十五と、過半数

が寇燬している。その大半以上が明初に復興されたもののようで、洪武年中に、重、復、新建の成った仏寺は合計一一五件、重修は二十五ヶ寺を数える。省内の寺刹数と罹災の計数は別表(二)の記載の示す如くである。

福建の仏教は、王氏が閩に入って仏教の興隆に意を用い、度僧三万、増寺二百六十七を数え、仏国と称せらるるに至ったという。[註3] 福建通志は、寺志の記述が簡略で、元末における寺刹の罹災状況を明確に把え難いが、洪武、永楽の間に重建、修復がなされているものは、多少とも戦火に遭ったとみなしてよいであろう。通志所収の寺院数は上掲の数字に遙かに及ばないから遺漏も多いと思われるが、その記載による限りでは、洪武年中の重建が九、重修四件を数えるに過ぎない。ただ明代に創建されたとみられる寺刹の数は二十一箇寺に上っているのであって、新設仏寺数において他の三省を著しく上回っているのが注目されるのである。蓋し証なき像法の世に、また行証ともに欠けた末法の世においては、教法流布の場としての伽藍の建立、修復こそ残された唯一の作善の業であり、かつ仏法興隆の営みに参画しているという現実感を抱かせる功徳行とみなされたであろうことは容易に理解し得るところであり、それだけに心ある緇素にとってそれが大きな関心事であったと思われる。

寺刹の罹災状況は、戦史の研究を通して子細に究明さるべきであり、またその修復がどのような政治的、社会的背景の下に推し進められたかは、検討を要する問題であるが、今はただ一部の資料を提示するに止めたい。[註4]

註1 市村瓚次郎『東洋史統』三、二九〇頁、平凡社『東洋中世史』四、二四五頁、有斐閣『東洋中世史』二八六頁。

註2 竜池清「明初の寺院」一二頁。また山陰県天衣寺のように「元末寺与仏像悉燬」といった例も他に少くなかったであろう。浙江通志 巻二三一、三八一四頁。

註3 仏寺は梁代から増加し、隋・唐時代には数百を以て計するに至ったという。重纂 福建通志 巻二六四、四九七七頁。

註4 江蘇省、とくに金陵の周辺を併せて取挙げたいと考えていたが、資料閲覧の機会を逸したので、この度は割愛した。

元末寺刹の罹災と復興状況

(一) 浙江省

寺院名	所在地	毀損時	重建時
杭州府			
銭塘県 仁和県附郭			
百法寺	在呉山下	元末	天順元年
僊林慈恩普済教寺	安国坊	(張氏以ㇾ寺為二軍器局一)	
天長浄心寺	仁和北壁後洋街	元季	景泰間
大中祥符律寺	祥符橋	至正末	洪武間
潮鳴寺	郡城東北	兵燹	後重建 洪武廿四、立叢林
広寿慧雲禅寺	艮山門内白洋池	至正間	洪武十七年
長明寺	章家橋東	庚子(一三六〇?)	洪武十八年
霊芝崇福律寺	東花園崇新巷	元季	正統間 洪武廿四、立叢林
慧林寺	蒲場巷	至正間	洪武初
蓮居庵	土橋東	燬於兵	万暦六年
悟空寺	淳祐橋東	元末	永楽元年
相国寺	淳祐橋東北	元末	洪武初
崇寧万寿教寺	府城南二里	元季	洪武初
金剛広福教寺	板児巷	至正末	万暦辛亥
慈光寺	銭塘芝松坊	至正	正統間
開元寺	府治南清平山麓	元季 兵燹	
宝奎寺	呉山下、宋丞相喬行簡故第元季燬		弘治間
銭塘県城外			
昭慶律寺		元末	洪武初
大仏寺	宝石山麓	至正間	永楽間
瑪瑙寺	葛嶺東	元末	永楽間
智果寺	葛嶺上	元末	洪武初
招賢律寺	葛嶺下	元末	
護国仁王寺		至正末	洪武初
崇恩演福禅寺	鳳篁嶺	至正末	
下天竺寺	県西十七里	元末	洪武間
上天竺寺	北高峰麓	元季	重建
妙行寺(接待)	湖野左家橋西	元季	宣徳二年
仁和県城外			
報国寺	鳳凰山麓	元末	洪武廿四、立叢林
福田慶寿寺	候潮門外羅木橋	至正間	泰定間 洪武廿四、立叢林
香積寺	江漲橋北	元末	洪武四、辛亥為叢林
崇先顕孝華厳教寺	皐亭山陽	元末	洪武十二年
化度寺	江漲橋	至元間兵燹	至正間
安隠寺	臨平山南	至正末	洪武廿四、立叢林
海寧県			
金仏寺	県西松林舗	元末	洪武廿四、立叢林

碧雲寺	沈山東北鉢盂嶺下	元末	洪武二年

富陽県

慈護聖禅寺修	県治西	元末	洪武元年
偃松寺	県西南馴雉村	元末	洪武十一年
能仁寺	県西南太平村	至正丙申兵燹	洪武初
大雄寺	県西南五十里	元末	洪武初

余杭県

径山興聖万寿禅寺	県西北五十里天目之東北峰	元末	洪武間
法喜寺	県東半里	至正末	洪武元年
南山普寧禅寺	県東北常熟郷	元末	洪武三年
慈聖寺	県東北常熟郷	至正末	洪武間

臨安県

浄土禅寺	在県南二里南北郷	元末	洪武十五年
太平万寿禅院	県東霊鳳郷	至正十九	洪武九年
化城院	県東北一里	元末	洪武六年
興教院	県東霊奉郷	元末	洪武元年
東天目山昭明禅寺	県西四十五里	元末	洪武二十年

於潜県

大覚正宗禅寺	県東蓮華峰	元末	復建

新城県

宝勝院	県西七里	元末	重建
宝乗寺	県西四十八里	元末	重建
治平寺	県治西	元末	洪武十五年
法会寺	県南三十里	至正末	洪武初

比較的損害軽微

嘉興府

嘉興県秀水県附郭

覚海寺	府治西南一里	至正末	永楽十五年
楞厳寺	治西北二里三十歩	元末	洪武初

嘉興県城外

霊源寺	県南二十六里	元末	洪武七年
先福寺	県東十八里	元末	正統三年

嘉善県

慈雲寺	治西北	元末	永楽元年
白蓮教寺	県治東北	元末	洪武初

海塩県

福業院	県西南二里	元末	洪武二年
平湖県			
福臻寺	北門外四里	元末	洪武初　教寺
桐郷県			
恵雲教寺	治西北百五十歩	元末	洪武初
湖州府			
烏程県城外			
道場護聖万寿禅寺	府城南道場山	元末	重建
武康県			
証道教寺	県西二百歩	元末	洪武九年
竜山禅寺	県東竜山下	元末	洪武二十年
烏回禅寺	県北烏回山	元末	洪武十九年
紹興府			
山陰県城外			
融光寺	県西柯橋鎮	元末	洪武十四年
黄巌県			
天皇寺	去委羽洞一百二十歩	至元丙子兵燬	
台州府			
仙居県			
顯慶寺	県西五十歩旧在紫擇山下	至元二十五	
護聖寺	県東南四十五里	至元間	万暦間
金華府			
永康県			
上封寺	県東北百歩	至元初燬	万暦十年廃
衢州府			
常山県			
欽教寺	県東二十里	至正壬辰	洪武十年
江山県			
宝陀寺	在左坑	至正八年以後	万暦間
開化県			
霊山寺	県西五十歩	元末	至正戊戌
宝積院	県西三十五里	元至正？壬辰	
厳州府			
建徳県附郭			
報恩寺	府城内	元末	洪武二年
建徳県城外			
九峰寺	県西北五里	元末	洪武元年
桐廬県			
新会寺	県東十里	元末	洪武中
浄土寺	県西北三十五里	元末	洪武四年
分水県			
玉瑞寺	県北三十里	元末	洪武初
深寧塔院	県南慶雲山	元	弘治間
温州府			
永嘉県城外			
福聖寺	在四都	元	至正間
楽清県			
寿昌寺	在黄塘	至正間	洪武十六年

浙江省内の寺刹と元末燬焚寺刹数

杭州府		
銭塘県仁和県附郭	(6)	9/31
銭塘県城外	(3)	7/33
仁和県城外	(1)	5/13
海寧県		2/13
富陽県		4/11
余杭県		4/8
臨安県		5/7
於潜県		1/6
新城県		4/5
嘉興府		
嘉興県秀水県附郭		2/7
嘉興県城外		2/10
秀水県城外		8
嘉善県	(1)	1/7
海塩県		1/11
石門県		8
平湖県		1/8
桐郷県		1/6
湖州府		8
烏程県城外		1/9
帰安県城外		13
徳清県		15
武康県		3/13
他に元季燬		4
安吉州		4
孝豊県		5
寧波府		
鄞県府郭		10
鄞県城外		12
慈谿県		8
奉化県		7
鎮海県		8
象山県		6
定海県		7
紹興府		
山陰県会稽県附郭		12
山陰県城外		1/10
会稽県城外		20
諸曁県		6
余姚県		6
上虞県		7
嵊県		6
新昌県		8
台州府		
臨海県城外		41
黄巌県	(1)	13
天台県		30
仙居県	(2)	16
寧海県		13
太平県		17
金華府		
金華県城外		15
蘭谿県		9
東陽県		8
義烏県		14
永康県	(1)	6
武義県		5
浦江県		8
湯渓県		7
衢州府		
西安県附郭		2
西安県城外		18
竜遊県		12

常山県	(1)		10
江山県	(1)		13
開化県	(2)		9
厳州府			
建徳県附郭		1	1
建徳県城外		1	9
淳安県		0	9
桐廬県		2	8
遂安県			4
寿昌県			6
分水県	(1)	1	6
温州府			
永嘉県附郭			4
永嘉県城外			4
楽清県		1	11
平陽県			6
瑞安県			7
平陽県			6
瑞安県			7
泰順県			4
處州府			
麗水県附郭			1
麗水県城外			5
縉雲県			9
青田県			5
松陽県			7
遂昌県			6
雲和県			8
竜泉県			7
慶元県			15

(注) 横線の下の数字が府州県内の寺刹の数、その上は燬損した仏寺の数をそれぞれ表わす。括弧内の数は兵火によるかどうか確かでないもの。

(二) 江 西 省

寺院名	所在地	燬損時	重修建時
普賢寺	省城恵民門内		永楽間重建、嘉靖間(丙戌)修
清泰寺	南昌県南関口		景泰間移建
新林寺	南昌県六十二都		明代建立
大梵寺	南昌県灌城郷		洪武三、移建
永和庵	永和門外		万暦間改
生生庵	南昌県同仁祠左		崇禎間建立
大安寺	省城北		明初重建
報恩寺	新建県樵舎鎮		嘉靖間重興
翠巌広化寺	新建県洪崖郷		明初建立、嘉靖中廃
竜光寺	北竜沙岡		明代重修
佑清寺	新建県崇梵坊		明初創、南昌県治後遷元万暦間古心建
雲峰寺	新建県香城寺右		正徳間澄秀重修
霊観院	去香城寺二里		万暦末無来建
百丈寺	奉新県西百三十里		洪武中為禅寺叢林

宝雲寺	奉新県北門外	元季燬	洪武初重建 万暦間修
延恩寺	奉新県治東門内	元季燬	洪武間崇信等重創
隆教寺	奉新県新郷		洪武二十一増修、二十六叢林、正統間復修
定恵禅院	奉新県新興郷		永楽三、修 崇禎初増修
厳頭禅院	奉新県新興郷	元末兵燬	
大宝勝輪塔院	奉新県百丈寺西	宋燬	洪武初復 天順中増修
普化院	奉新県進城郷		天順二年建立 崇禎十七重修
普安院	奉新県奉化郷	元季燬	洪武五、智義建
戒徳院	奉新県奉化郷		景泰四、建 万暦三十二修
寒渓院	奉新県奉化郷		洪武初幻無重修 宣徳間増修
成覚院	奉新県新興郷		崇禎中増建
雲陽寺	靖安県西南源部		嘉靖間重建 万暦三十七増修
曹渓寺	靖安県北大梓都		万暦十八、重建
法楽寺	靖安県東二百歩	元末燬	洪武四、興復 正統五、増建
暇僧寺	靖安県忠夏都		洪武初法宝重建
延慶寺	靖安県西忠夏都		洪武初道泰復興
金沙寺	靖安県西石馬都		万歴二十性朗建
黄竜寺	靖安県南五里	元季兵燬	正統甲子永海重建
宝月院	靖安県北象湖都		景泰四重建
報身院	靖安県西南源部		正統間本然重建
書堂庵	靖安県西新興都		正統間重建後燬
雞鳴山寺	義寧州治西一里		宣徳間重修
南山院	義寧州南二里	元末兵燹	成化間円亮重建
清虚庵	義寧州治西北二里		万歴中建
観音寺	府城高明門内	元末燬	万歴三十四鋳像
聖済禅寺	上高県南善塘頓	至正間兵燬	明洪武九年湛然重建、明末兵燬
多宝寺	上高県旧洞山	延祐遷県治後兵燬	洪武九年於故址重建
金地寺	上高県南四十里	元時兵燬	洪武間本性慕建
香山院	上高県西浮樓嶺東麓	元季兵燬	洪武十年海巌重建
広利院	上高県西石虬渡	元燬於兵	洪武七年僧中立重建
洞山普利禅寺	新昌県三十都	元末燬	崇禎中浄聰智卲重建
報恩寺	宜春県治東門内	元燬	明重建
福勝寺	分宜県西五里		洪武二十四、立叢林
宝積寺	萍郷県南	元廢	洪武間妙懃重建

普通禅寺	萍郷県北宣化里	元末燬	嗣観重建
永昌寺	萍郷県治小西門外	元燬	洪武時抄勲重建
崇信寺	万載県南布政分司左	元季兵燬	洪武間重建
三学院	万載県西寿峰山	元季兵燬	洪武三年僧池重建
光化院	万載県治北	元季兵燬	洪武四年爲宣重建
延寿院	万載県東北		洪武三年文隠重建
恵林院	万載県西南		洪武二、中峯重建
広嚴院	万載県西		洪武三、石隠重建
崇道院	万載県西		洪武元、昭雲重建
勝果院	万載県西		洪武四、爲宣重建
安徳院	万載県東		洪武四、無言重建
浄信院	万載県西礼山		洪武三、智縁重建
下法会院	万載県北		洪武三、古鏡重建
天寧寺	臨江府学左		洪武間知府劉貞重建
慧力寺	臨江府城南		洪武間重建
石渓竜居院	臨江府学左	元末燬	洪武十七、重建
西華寺	新喩県蒙山陽		洪武初重修
崇慶寺	新喩県西門外	元末燬	洪武三、重建
天長寺	峡江県十一都	元末燬	宣徳二、円昂修

東山祥符寺	廬陵県治南		洪武五仍貫重建 二十四 立叢林
隆慶寺	吉安府城西	元季燬	壬辰維渕重建
龍集寺	河東倚大雲山		洪武二、了智重建
浄居寺	廬陵県青原山	元末兵毀	洪武九、師肇復修 二十四 爲叢林
天賜寺	廬陵県七十七都		洪武三、永寿重建
大徳寺	廬陵県教場後		洪武五、竹漢重修
靈嚴寺	廬陵県瑞慶山		洪武三、徳安重興
常田寺	廬陵県儒行郷		洪武七、度祥重建
再興寺	廬陵県平坡		洪武三、無尽重修
多寶寺	廬陵県儒林郷		洪武十、興道重修
永寧寺	廬陵県吉唐橋		洪武三、崇徳重建
慧鐙寺	廬陵県永和鎮		洪武元、徳泰重興
永楽寺	廬陵県葛田		洪武五、泰登重興
因果寺	廬陵県儒林郷		洪武間（移）重建
西峰宝龍禅寺	吉安府城南		洪武間重建
報恩講寺	吉安府城東		洪武三、昂霄重建
明心院	廬陵県白沙		洪武二、天然重建
三徳寺	泰和県珠林		万暦間重修
臨江院	泰和県下堡		洪武三、修葺
龍華寺	吉水県南	崇禎十六兵毀	

周嶺寺	吉水県	洪武間僧宝重創
興福寺	永豊県一都	洪武間如渕重建
明禅寺	永豊県興平郷	洪武間霊源重建
香厳禅寺	永豊県興平郷	洪武十八茂林重興
広恵院	永豊県遷鴬郷	洪武六、奇峰復建
円果院	永豊県竜雲郷	洪武五、悦初重建
慈済庵	永豊県竜雲郷	洪武二十八劉普興重建
法済院	竜泉県六廂	洪武初重建
東山寺	永新県治東 元季兵毀	洪武間無諳修
月渓寺	永寧県東九保	洪武七、僧迪修
游撫寺	永寧県西二保	洪武七、如心修
曲観院	永寧県南四保	洪武五、心閑修
蓮花院	永寧県西南	洪武十一、見源修
後山寺	崇仁県礼賢郷	崇禎間恒沙等起叢林
西林寺	崇仁県巴陵門外	洪武三十一、重興
仰山寺	崇仁県礼賢郷	嘉靖初重葺
再建 地蔵寺	崇仁県長安郷	嘉靖四十五建
興福寺	南城県西麻源	万暦中印徧重建
寿昌寺	南豊県魁星坊	洪武二十四帰併西林等爲叢林嘉靖重修
西林寺	南豊県西七十里	大徳正徳間修、嘉靖間寇乱此寺独存
保福寺	南豊県東門外	洪武十七構大殿故址洪武二十四帰併福恵等爲叢林 十二寺を叢林とした
浄居寺	新城県城内東山	（洪武二十四?）帰併爲叢林 後燬於兵
寿昌寺	新城県東興郷石峡	洪武間宏遷建黄竜峯下・永楽正統間修葺
福山寺	新城県南四十里	明帰併白石等爲叢林（六院を叢林となす）
慈源寺	新城県北三十里	帰併西林寺六院爲叢林
竜湖寺	新城県竜湖山下	崇禎間元諡重建
景徳寺	上饒県南里	洪武間立叢林
祥符寺	上饒県渓南 元季兵燬	天啓間知府蕭思修
薦福寺	上饒県来蘇郷 元季兵燬	明初重建
青巌寺	上饒県太平郷	洪武間立叢林
香林院	上饒県霊山郷	洪武間立叢林
上団 資福院	上饒県乾之郷	洪武間立叢林
覚林寺	玉山県順城郷	洪武間立叢林
普寧寺	玉山県信豊郷 元末燬	永楽宣徳間僧会行祀先後重建
真如寺	弋陽県治東	洪武二十二重建
吉巌寺	弋陽県新政郷 元季燬	永楽中知県延徳清重県

蓮塘寺	弋陽県西十里		洪武間文智重修 永楽間敬善増建
青蓮寺	貴渓県古白衣寺		嘉靖間修、万暦間復建
天王寺	鉛山県北一里		万暦三十重建
観音石庵	鉛山県西三里		万暦間建
博山寺	広豊県西南崇善郷		万暦間大蟻重興
薦福寺	鄱陽県督軍湖北	元季燬	永楽間重建
浮州寺	鄱陽県東湖中		万暦間重建
青峯寺	浮梁県東隅 青峯山	元末燬	洪武元重興
観音寺	浮梁県西隅	元末兵燬	洪武五重興
宝積寺	浮梁県北隅	元末寺壊	洪武十七重興
崇教寺	浮梁県里仁都 陽府山	元末燬	洪武元重興
資福寺	浮梁県下梅田都		万暦間重修
資福寺	浮梁県下義合都		洪武十一重興
資福寺	浮梁県湖田都		洪武時復建
臨河時	浮梁県長源都	元末燬	洪武間重興
安谷寺	浮梁県益源都	元末兵燬	洪武初重興
石仙寺	浮梁県南頓都	元末廃	洪武間重興
興化禅寺	浮梁県上梅田都	元末燬	洪武元重興
祝聖寺	浮梁県法京都	元末燬	洪武初建
興福寺	浮梁県三里都	元末燬	洪武元重興
興福寺	浮梁県儒林都	元末燬	洪武三重修
雙峰寺	浮梁県大惟都	元末漲	
青竜寺	浮梁県新正都	元燬	洪武間重興
泗川寺	徳興寺五都	万暦間燬	洪武八本立修 闊海源重修
明教寺	徳興県十四都		洪武二復建
永福寺	徳興県十七都		洪武十六復建
資福寺	徳興県二十三都		洪武十五重建 万暦間復建
臨福寺	徳興県二十七都		永楽十七重建
霧山寺	徳興県三十都		永楽間重修
鳳凰寺	徳興県三十八都		洪武初重修
東泉寺	徳興県二都		永楽八、重建
東台資勝寺	安仁県三都	元季兵燬	洪武間興復
吉泉寺	安仁県崇義郷		洪武初復興
呉山寺	安仁県崇義郷	至正十二兵燬	洪武二十五帰併南源、中峯、華山、南禅、吉泉池山、了山七院成叢林
恵禅寺	安仁県永禄郷	元季兵燬	洪武初重建
長慶寺	安仁県二十一都	元季兵燬	明初雪窓重興
水陸寺	安仁県二十四都	元末兵燬	洪武十二移、二十九重修

中興寺	安仁県十四都	元季兵燹	明初重修、帰併
馬祖禅寺	安仁県十四都	元季兵燹	明初道本重興二十五、中興道院霊山庵入寺爲叢林
蓮花寺	安仁県崇徳郷	元季兵燹	洪武十六性空重建
新光寺	安仁県十七都	元季兵燹	明初玉庭重建、二十五帰併蓮花叢林
蓋竹寺	安仁県長城郷	元季兵燹	明初小峯重興、二十五帰併玉石叢林
白塔寺	安仁県長城郷	元季兵燹	明初明成重興
福慶教寺	安仁県治東	元季兵燹	明初大用復興嘉靖間同玉石徒沖虚山
玉石教院	安仁県治東	元季兵燹	明初無尽、慶雲修嘉靖間徒創沖虚山
天寧寺	星子県西城		万暦二十一重建
屏風寺（余峯庵）	星子県屏風山		成化広玉重建
恵日寺	星子県仙居洞	咸豊八、兵燹	天順間恵広重建後恵通修
白石庵	星子県楞伽院		景泰中徳正修
新開寺	都昌県治西南		洪武中重建
金山寺	都昌県東北		洪武二十四帰併台山嘉瑞霊溪周溪以為東林
清隠寺	都昌県南山		嘉靖間重建
瑤田寺	建昌県雲居南麓		天啓間復初重建
同安寺	建昌県鳳棲山		洪武中仏燦重建
竜泉寺	建昌県新城郷		景泰中重修
泗州寺	建昌県釣台郷		正統間道隆修
布水寺	建昌県布水巌		景泰中燕開重建
尊聖塔寺	建昌県北門外		洪武初重修
華曇院	建昌県東四十里		洪武間継文修
大唐寺	安義県北		洪武初継承重建
開陽院	安義県依仁郷		天順元、広徹重建
鳳凰庵	安義県東五里		嘉靖間新建天啓崇禎間修
能仁寺	徳化県治東	元燬	洪武十二重建崇禎七、修
竜池寺	徳化県甘棠湖北	元末燬成化二十三燬	洪武十一復正徳三、修
舎利寺	徳化県治西北	元燬	明初復成化四、復建
清泉寺	徳化県仁貴郷	元燬	
海天寺	徳化県竜開河岸		正徳間建寺
竜泉寺	徳化県仁貴郷	元燬	祖観重建
竜泉寺	徳化県赤松丁家山		万暦間月空建
円覚寺	徳化県仙居郷		洪武八、建
多仏寺	徳化県仙居郷		正統復興
高良寺	徳化県甘泉		明初復興
天池寺	徳化県盧山之嶺	元燬	洪武六復建
仰天坪寺	徳化県盧山極嶺		万暦間建

大林寺（上寺）	徳化県盧山嶺		正徳間修
同（中寺）	徳化県錦澗橋北		明初重建
同（下寺）	徳化県錦澗橋西		宣徳間修
黄竜寺	徳化県盧山中		明初了堂重建
東林寺	徳山県盧山麓		洪武六、重修
西林寺	徳化県白鶴郷	元代兵燬	洪武十四、復建 崇禎四、重修
崇福寺（上寺）	徳化県盧山講経台下		明性端修
同（下寺）	徳化県盧山講経台下	元燬	宣徳間重建
仏母寺	徳化県封一郷	元燬	洪武五継純重建
化成寺（下寺）	徳化県香鑪峯下	元燬	成化間重建
円明寺	徳化県南昌郷	元燬	明初復興
普勲寺（泣渓院）	徳安県西一里	元燬	洪武間性澄重建
羅漢寺	徳安県南二里	元燬	成化間重建
化成寺	徳化県三上寺講経台下	元末燬	成化間重建
円明寺	徳化県南昌郷	元燬	明初復興
普勲寺	徳安県西一里	元燬	洪武性澄重建
羅漢寺	徳安県南二里	元燬	成化間重建
陽居寺	徳安県南十里	元代兵燬	成化間復建
甘露寺	徳安県南二十里	元燬	天順間重修
精進寺	徳安県北二十里	元燬	正統間重建
無垢寺	徳安県北二十里	元燬	成化嘉靖間増修
宝積寺	徳安県西北二十里	元燬	正統間重建
万安寺	徳安県西二十里	元燬	永楽間重建
積慶寺	徳安県西三十里	元燬	洪武間重建
芙蓉寺	徳安県西北三十里	元燬	正統間重建
開化寺	徳安県西四十里	元燬	永楽間覚興重建
法安寺	徳安県北呉山南	元燬	天順間重建 崇禎末性真修
悟真寺	徳安県西梅家壠	元燬	宏治間重建
永清寺	徳安県西石潭頓	元燬	天順間道俊重建
天興寺	徳安県北六十里		洪武間建
広修寺	徳安県北六十里	元燬	性空重建
朝天寺	徳安県西北百里		明初瑞庵建
布金寺	徳安県西北桑園	元燬	明性寯重建
安福寺	徳安県西北百十里	元燬	永楽初重建
東山寺	瑞昌県治東百五十歩		洪武六重修 正徳十二、復建
浄明寺	瑞昌県洪山		永楽初重修
多福寺	瑞昌県首保	元末兵燬	洪武間重修
五乳寺	瑞昌県治		明徳清新建

普済寺	瑞昌県下巣湖	元末兵燬	洪武間碧宏建 宏治間智春修
筋竹寺	瑞昌県筋竹堡		宏治間修
烏竹寺	瑞昌県西南四十里		万暦間重建
雙泉寺	瑞昌県西二十里		永楽十四、修
海清寺	湖口県上鐘山		天啓間明天拡修
下鐘山寺（宝鐘寺）	湖口県北	元末燬	洪武間道宗重建 万暦間重修
竜華寺	湖口県通済門外		天啓二立禅初建 崇禎六、修
陪湖寺	湖口県城東四里	圯災	成化元、修
無相寺	湖口県柘磯下		正統成化間累修 崇禎間重建
莫櫟寺	湖口県酎山		成化三、重建 正徳中修
治平寺	湖口県黄茅潭	元末兵燬	成化中智隠修
三賢寺	湖口県彭沢郷	元末兵燬	明初重建
蓮花寺	湖口県五柳郷	至正十二兵燬	洪武間復修
吉祥寺	湖口県城南三十里		洪武成化嘉靖累修
普明寺	彭沢県治西		永楽間重建
安禅寺	彭沢県東十里		洪武九、重建
崇梵寺	彭沢県東五十里		洪武間重建
宝林寺	彭沢県東五十里		洪武間重建
宝華寺	彭沢県五柳郷		天順三、重修
鷲峯寺	彭沢県太平郷		宏治間重修
定安寺	彭沢県西三十里		正統間円悟修
真覚寺	大庾県東山		永楽中爲寺
嘉祐禅寺	大庾県治東北		正徳間重建
広教寺	上猶県烏頭郿		成化中重修
太平庵	上猶県西南		永楽間邑人建
雲峯寺	崇義県沙渓		万暦間雲峯重建
甘露寺	崇義県十八面山下		万暦間里民建
水口寺	崇義県城北		崇禎間建
宝華寺	贛県治西北百二十余里		崇禎末増建
寿量寺	贛県城東	元末燬	洪武中重修
馬祖巌寺	贛県仏日峯		万暦初、悟学、本恵等建
東勝山寺	贛県東門外		万歴間明海建
法竜山庵	贛県四会郷	元燬	嘉靖二宝堂重建
妙明寺	興国県文渓	嘉靖十四圯	洪武七修二十九修
霊山寺（竜華）	興国県東十五里	元末燬	永楽初重建
延寿寺	興国県新郿		洪武間修
普恵寺（西禅）	興国県西南	元末燬	洪武四重修
三壇寺	興国県西門外		洪武、万歴間修
六祖寺（梵行院）	会昌県北		洪武五、無碍修 成化十七性暉修

仰山寺	会昌県南七里		宏治八、重修
南禅寺	会昌県鎮湘門内		成化二十一洪福修
蕭巌寺	会昌県蕭帝巌		永楽間重建
大明寺	会昌県大明巌		嘉靖間建
竹林寺	寺会昌県南		天啓六建
智勝禅院（仙巌寺）	会昌県		隆慶四、明円建
大興寺	安遠県西古田坊	元燬	洪武九重建、宏治四修、嘉靖四十五重建
妙相寺	安遠県版石堡	至正間燬	永楽十四重建 成化二十二修
海印寺	安遠県竜泉堡	元末兵燬	宣徳間重建 成化六万金改建
祖印寺	安遠県太平堡		永楽間重建
浄業寺	安遠県里仁堡	元貞元燬	天順二、重建
方広寺	安遠県竜頭堡	至正間燬	宏治五、重建
広法寺	安遠県竜安堡	至正兵燬	天順六、重建
東林寺	安遠県太平堡	燬	正統初重建 宏治元、修
文林禅院	安遠県西門外		崇禎間邑人唐邦教建
西来庵	安遠県修田坊		崇禎間邑人杜欽聯建
東山寺（梵安院）	竜南県東門外		洪武二、増修 万歴五、修葺
西山寺	竜南県上西門外	元末廃	正統七、修復 嘉靖四十五復仏寺 崇禎十五建準提閣
演教寺	竜南県東南五里		洪武七、重修
塔下寺	竜南県南五里		天順間、宏治十三修
東禅寺	定南庁東城外		隆慶五、為祝聖道場万歴九、修
神仙庵	定南庁横江堡	元末燬	
瑞雲庵	定南庁東一里		万歴十二真元建
永甯寺	甯都州城文明門外		万歴二十、建
東昇山寺	甯都州城東石塘里		万歴間建
勝因寺	瑞金県西一里		万歴七、重修
竜珠寺	瑞金県西南五里		万歴三十堵奎臨建
文興寺	瑞金県東南五里		万歴四十五潘舜歴倡建
永福寺	石城県西門外	元廃	洪武二、結庵 永楽成化間増集
蓮花寺	石城県北十里		万歴三十六海鳳建
金口寺	石城県治西		万歴間海鳳建
内宮禅院	石城県西三十里	至正十三寇燬 正統十四寇燬 嘉靖四十燬	洪武元明海重建 永楽七澄清修 景泰六道正重建
宝福院	石城県東南	元燬	洪武三明海重建
法林院	石城県長楽郈		洪武十二常清修 景泰四、増建

江西省内の寺刹と元末罹災状況

江西省城内外及び南昌県周辺	45
新建県周辺	41
豊城県	8
進賢県	13
奉新県	4/17
靖安県	2/14
武寧県	11
義寧州	1/12
以上の州県内の道観	81
高安県周辺	1/18
上高県	5/17
以上の県内の道観	21
新昌県	1/16
宜春県	1/8
分宜県	9
萍郷県	2/11
万載県	3/19
以上の県内の道観	21
臨江府	1/5
清江県	11
新淦県	13
新喩県	1/8
峡江県	1/10
以上の県内の道観	35
吉安府及び盧陵県周辺	2/36
泰和県	26
吉水県	14
永豊県	13
安福県	8
竜泉県	2
万安県	12
永新県	1/10
永寧県周辺	11
以上の府県内の道観	56
撫州府及び臨川県周辺	16
崇仁県	21
金谿県	11
宜黄県	17
楽安県	14
東郷県	8
以上の府県内の道観	28
建昌府及び南城県周辺	18
南豊県	12
新城県	21
広昌県	11
瀘渓県	10
以上の府県内の道観	22
上饒県	2/14
玉山県	1/16
弋陽県	1/17
貴渓県	14
鉛山県	16
広豊県	14
興安県	7
以上の県内の道観	29
饒州府及び鄱陽県周辺	1/26

余干県	11
楽平県	15
浮梁県	13/15
徳興県	15
安仁県	13/17
万年県	5
以上の府県内の道観	31
南康府及び星子県周辺	30
都昌県	8
建昌県	13
安義県	9
以上の府県の道観	27
徳化県	15/28
徳安県	17/19
瑞昌県	2/15
湖口県	4/14
彭沢県	9
以上の県内の道観	11
南安府及び大庾県周辺	15
南康県	7
上猶県	8
崇義県	5
以上の府県内の道観	10
贛　県	2/18
雲　県	3
信豊県	9
興同県	2/9
会昌県	8
安遠県	6/10
竜南県	1/3
長寗県	5
定安庁	1/3
以上の庁県内の道観	19
寗都州	6
瑞金県	7
石城県	2/7
以上の州県内の道観	6

（注）4/17とある場合、下の数字は当該州県内の寺刹数、上の数字は燬損仏寺数を表わす。

(三) 福建省

寺院名	所在地	重建時
文殊般若寺	閩県遂勝里	成化七年重建
枕峰寺	閩県帰義里	正統間重建
雲門寺	閩県江左里	永楽間重建
劈巖庵	閩県嘉崇里九仙山支城外	嘉靖間新建
隆寿保福寺	侯官県二都郡厲壇北	洪武初重建
神光寺	侯官県烏石山	成化間重修
西禅寺	侯官県二都怡山	宣徳間重建
雪峰崇聖禅寺	侯官県嘉祥東里	宣徳間重建
寿山広応院	侯官県稷下里	万暦間重建
精巌寺	侯官県七都象山西	洪武間重建

明・清時代教界の展望（長谷部）

洪山寺	侯官県淇山橋西	正徳間新建 万暦間重修
霊雲寺	侯官県十九都	嘉靖間新建
霊鷲寺	侯官県烏石山南	嘉靖間新建
三峰塔寺	長楽県西登高山	永楽間重修
竜溪寺	長楽県郎官山麓	明代　新建
東林庵	長楽県大宏里	嘉靖間重修
斂石院	福清県方興里	隆慶間重建
瑞巖寺	福清県新安里	洪武間重修
福盧寺	福清県福唐里	万暦間新建（葉向高）
瑞雲寺	福清県東隅	万暦間新建（葉向高 凌漢翀）
大中玉泉寺	連江県光化里	永楽成化間重修
清祥寺	連江県賢義里	景泰間重建
竜興院	連江県嘉賢下里	景泰四年重建
聖寿寺	羅源県羅平里	宏治間重修
竜華寺	羅源県徐公里	崇禎間重建（如濱）
水陸寺	羅源県治西	洪武間重修（知県 傅希悦）
聖水寺	羅源県南蓮華峰下	万暦間重建（知県 倪千穐）
宝勝寺	羅源県宝勝山	宣徳初新建
蓮華寺	羅源県蓮花山	万暦初新建
塔院寺（塔前庵）	羅源県呂洞嶺巽峰塔下	万暦間新建
西峰寺	古田県四十五都	成化間重修
天王資福寺	古田県二都大吉山	万暦間重修
大目寺	古田県四十六都	永楽間重建
弥勒寺	古田県四十一都	洪武間重建
吉祥寺	古田県治後	成化間重修
霊巌寺	屛南県二十八都	万暦間重建
霊峰寺	屛南県二十五都	成化間重修
保恩寺	閩清県九都	嘉靖間新建
重光寺	永福県開平里	隆慶間重建
極楽巖院	永福県開平里	隆慶間重建
法海寺	莆田県府城西南	洪武初重修（希聞、雪舟）永楽、正統、宣徳継重修
永明寺	莆田県望江里	万暦間重建
鳳林寺	莆田県紫霄巖麓	万暦間新建（知府 林鴻盛）
鎮国東禅寺	晋江県東三十九都皇山之陽	宣徳間重建
空相院	晋江県十九都	永楽間重修

清浄寺	晋江県府学東	明重建隆慶間重修
延福寺	南安県西郊九日山下	洪武間崇禎間重修
興教梵天寺	同安県大輪山之阿	至正間災洪武初重建（無為）
化竜寺 呉山寺	同安県感徳里	正徳七年重修
妙峰寺	同安県翠屏山	明代（里人李先春）
隆寿寺	漳州府竜渓県治西北紫芝山麓開元寺右	洪武間浄安院址に移建
大山院	漳州府城北六里	明末新建（純如）
峰蒼庵	南靖県北	景泰五、重修
万岫庵	南靖県西	成化二年重修
天寧光孝禅寺	南平県治西	成化間燬弘治間結庵
天湖義院 正識寺	順昌県治北	洪武三十五重建
興福院	将楽県永康都	洪武三十一重建
雲際寺	沙県和仁坊	景泰三年重建
安仁寺	沙県十二都	洪武間 復建
永安禅寺	建寧府建安県黄華山麓	洪武間 重建

広福白雲崇梵寺	建寧府建安県光禄坊	洪武十年移建此
天堂庵 真如寺	建安県白鶴山麓	明代増建
開元寺	欧寧県雲際山麓	天順間増建
方広寺	欧寧県雲際山麓	正徳間重建
浄慈庵	欧寧県水西	明初 改建（聞谷）
大悲寺	欧寧県三桂里	洪武間新建
洪山寺	欧寧県崇政里	永楽間新建
多宝寺	欧寧県治南五里	万暦間新建
西山蘭若寺	崇安県貞節坊	洪武間重建
集慶寺	浦城県北郷永康里	万暦間重修
卵齋寺	浦城県水湾	万暦間（鼎）重建（方通）
円通塔院	浦城県南浦門外	正統九年景泰万暦崇禎 重修
霊鳳寺	浦城県赤木敦清湖里	明代 新建
資聖寺	浦城県大山通徳里	明代 新建
南峰庵	松渓県杉渓里	成化間新建
亀峰寺	政和県治西	洪武初移建此
宝蓋寺	光沢県永寧里	正徳間新建

観音寺	泰寧県挽舟嶺	明代　新建
東林寺	汀州府長汀県蔡坊	万暦間新建
戒願寺	長汀県戒願嶺	天啓間新建
普覚寺	寧化県治東北泉上里	宣徳間重修
南禅寺	霞浦県万安里	隆慶元年重建
南峰庵	霞浦県南峰山	洪武十六、新建
霊巌寺	福安県廉村	成化間重修
熙禅寺雍	寧徳県安楽里	成化十年重建
興福庵	寧徳県十六都	宣徳四年新建 万暦四十四重建

福建省の寺刹（通志所収）

福州府	
閩県	37
侯官県	46
長楽県	30
福清県	20
連江県	20
羅源県	15
古田県	17
屏南県	15
閩清県	10
永福県	14
莆田県	39
仙遊県	13
泉州府	
晋江県	20
南安県	21
恵安県	15
同安県	16
安渓県	9
漳州府	
竜渓県	17
漳浦県	7
海澄県	2
南靖県	6
長泰県	5
平和県	1
詔安県	3
延平府	
南平県	16
順昌県	5
将楽県	15
沙　県	10
尤渓県	10
永安県	9
建寧府	
建安県	33
甌寧県	43
建陽県	60
崇安県	40
浦城県	39
松渓県	23
政和県	25
邵武府	
邵武県	45
光沢県	19
建寧県	28
泰寧県	28
汀州府	
長汀県	16
寧化県	14
清流県	8
帰化県	6
連城県	8
上杭県	11
武平県	6
永定県	5
福寧府	
霞浦県	15
福鼎県	11
福安県	14
寧徳県	22
寿寧県	12

二　清代における仏寺の罹災状況

明末の崇禎以降、王朝交代期における動乱の余波を受け、寺刹が少くからず兵燹の被害を蒙ったもののようである。清代に入って、順治年中と、末期の咸豊年間に、兵火に燬かれた仏寺も数多くあるが、その事例をいちいち列挙することは省き、計数だけ記すことにする。

浙江省内では、重建、新増建、重修を含めて、順治年間に七十九件、康熙年間四五五、雍正年中、一七件となっている。康熙中の寺刹の重建、復修されたもので勅奉によるものが一部含まれている。雍正年間の一七件のうち、七件が勅を奉じて復修乃至重建されたものである。ところが江西、福建にはこうした例が少い。江西省では

順治年中、重興建一七、建一一、修一九。康熙、重、復改、移建を含め四一、建七、修二八。雍正、重改建三、修四。乾隆、重復建七、修二一。嘉慶、重増建二、修九。道光、重建二、建一、修一三。咸豊、重建一、修四。同治、重復建三、修六。

福建は前二省に比し稍々低調の感があるが、順治、重増建一〇、修五、建一。康熙、重改建二五、建二、修一四。乾隆、重復建一一、修九件その他となっている。

以上三省を通じて清代では康熙年中が伽藍の建立、修復工事が最も盛んであった。それは政府の対仏教政策、また一般の仏法に対する情熱をある程度反映するものであろう。

三　明代の教団と統制の一事例

明の太祖となった朱元璋は、至正四年に、饑饉と疫病によって父兄を失い、ついで母をもなくし、十七才の時、郷里の皇覚寺（鳳陽県東南二里）に投じて小沙弥となったとされている。そうした仏縁を有する太祖が、仏教に対し、多少とも親近感を抱き、教団の振興に意を注いだとしても、あながち不自然ではない。しかしながら元代における白蓮会弥勒教匪等、宗教団体の社会的影響力や、喇嘛僧の流した害毒を目のあたり見聞し、寺院生活の実態を表裏両面に亘って知悉していた彼が、爲政者の立場に身を置いた時、教団対策に重大な関心を抱き、厳重にこれを管理統制しようとの挙に出たことも理解できるのである。明代の宗教政策に関しては、先学の優れた論攷が多く発表されているから重説の要はないが、[註1]上掲の浙江、江西、福建三省の資料の中から教団の実情と統制の事例を拾い挙げてみよう。

明朝も基本的には儒教を中心とした態勢をとり、仏道両教に対しては極力その発展を抑制する政策を以て臨んだことは史家の指摘する如くであるが、別表の記載にみられるように、早くも洪武の初め、元年から二、三年以降、仏寺の重建、修復が始められていたことが判る。いま江西を例にとると、洪武初年から十年までの間に重復興建された仏寺の数は実に六十件を数え、洪武年中に復興されたものの大半以上に上っており、新建された寺刹も若干みられる。ところがこれと併行して、ほぼ同じ頃、政府は寺観の整理に着手していたらしいことも注目されている。太祖は僧道が民衆善導の一翼を担うことを期待していたようであるが、然るべき住持を欠き、教化の実を挙げ得ない、伽藍の結構のみあって有名無実の寺刹も相当数存在していたようである。それらは土豪に劫奪されるのでなければ、流民無頼の徒の巣窟と化し、僧俗が雑居して、そこに自ら戒律に背くような卑俗な生活形態が生れ、退廃の気風が瀰漫することとなり、たび重なる粛清にも拘らず、明代を通じてこうした傾向は改まらなかったかにみえる。例えば明末に元来が博山に入寺した際にも、在山の者の多くが肉食者流であったと慨嘆しているが、それは必ずしもここだけの例外的な現象とはいい難い。ところで洪武二十四年六月には申明仏教榜冊が発せられ、[註2]立叢林の事があり、七月には仏寺の清理が断行され、僧俗の混淆が戒諭された。この年に浙江省内で立てて叢林とした件数は通志によれば、洪武二十四年に六件であるが、[註3]江西では十八件あり、そのうち、洪武二十四年が五、翌二十五年には、安仁県に集中して五件、単に洪武年間とするもの及び年時を記さないもの八件となっている。それがどのような基準によって行われたか明かではないが、福山寺や呉山寺の場合のように、六院、七院と多数の寺院の帰併をみた例もあり、その大部分は甲乙院であったと考えられる。福建については通志による限り情況が不明であるが、立叢林の事例は、清代に入ってからも若干みられる。

国初からの寺刹の造立制限と統合整理毀却、[註4]及び僧規の粛清の試みにも拘らず、政策の不徹底も手伝って、教団の体質は一向に改善された徴候は認められない。そればかりか度牒の制限も緩み、売買が行われるに及んで僧道の数は夥しく増加し、教団は量的に甚だしい膨張を遂げるに至った。このような動きは正統年中からみえているが刑部主事李中の論難が示すように、仏教教団の腐敗が明代の中期には進行し、[註5]成化、嘉靖の頃にはとくに著しく、さらに堕落の一

途を辿った。僧道の社会的地位の低下も自ら免れぬところとなったのである[註6]。

註1　竜池清「明代の僧官」支那仏教史学四―三
竜池清「明初の寺院」支那仏教史学二―四
野上俊静「明初の僧道衙門」大谷学報二七―一
石田徳行「明代の寺荘について」東洋史学論集七
清水泰次「明代仏道統制考」東洋史学会紀要二
塚本善隆「明清政治の仏教去勢」著作集五
清水泰次「明代における仏道の取締り」史学雑誌四〇―三
間野潜竜「中国明代の僧官について」大谷学報三六―三
間野潜竜「明代中期の仏教対策」大谷史学四
野口鉄郎「明代中期の仏教界」東洋史学論集七
など。

註2　竜池氏上掲「明初の寺院」二一頁

註3　これに先つ辛亥（洪武四年）に一件みられる。

註4　武宗の代「正徳間詔毀寺観」と江西通志六、二六二九頁に見えている。

註5　野口氏前掲論文『東洋史学論集』第七、一八九頁、平凡社版『東洋中世史』四、三八〇頁。

註6　和田、守屋、村上共著『東洋中世史』には僧道は一般俗人より卑しいものと考えられていたと述べられている。三四六頁。

四　明清時代教界の動向

前掲の資料によって、元末の兵燹のために毀損された仏寺も、明代に入って間もなく再建が始められ、徐々に復興に向いつつあったことが知られるが、巨視的に眺めると、明初には、元末に活躍した師僧もかなり生存しており、その余勢を残しているが、次第に沈滞の方向を辿った。ところが中央の統制力の弛緩した中期以降、法道の寥落が仏教者の意識に上り[註1]、腐敗化が進行するさ中において教団は、むしろ潑溂たる生気を取りもどしたとの感が深い。

一方では世宗による道教優遇と、宮中の仏殿仏像の毀却といった破仏に類する事件もあったが、かえってそれが契機となって、教団内に反省自粛さらに刷新の機運が開けたともいえる。明代を通観する時、教化活動において実効を挙げ、名の知られた宗匠の数は、中期には寧ろ少く、後期に至って著しく増加する。それはまさに消えなんとする灯火の光芒のきらめきにも譬えられるであろう。例えば雲谷法会（一五〇〇―一五七九）弁徧融（一五〇七―一五八五）笑巌徳宝（一五一二―一五八〇）雪浪洪恩（一五三五―一六〇七）雲棲袾宏（一五三五―一六一五）車渓性沖（一五四〇―一六一一）

古心如馨（一五四一—一六一五）達観真可（一五四三—一六〇三）
憨山徳清（一五四六—一六二三）無明恵経（一六四八—一六一八）
湛然円澄（一五六一—一六二六）聞谷広印（一五六六—一六三六）
密雲円悟（一五六六—一六四二）雪嶠円信（一五七一—一六四七）
漢月法蔵（一五七三—一六三五）無異元来（一五七五—一六三〇）
天隠円修（一五七五—一六三五）永覚元賢（一五七八—一六五七）
藕益智旭（一五九九—一六五五）費隠通容（一五九三—一六六一）

等は何れも主として明末に活躍した人達であり、その余勢、影響は清初にまで及んでいる。

地域別に注目すると、明代仏教の中心地としては、三大刹、三十二中刹、百二十小刹を擁すといわれる南京が第一に挙げられ、杭州はこれに首位の坐を開け渡して二位につき、三位を雲南、北京、五台山が、ついで四位を四明、廬山地方が占め、姑蘇、峨嵋、普陀、四川各地、衡山、天台山、荊州、黄檗山寺等がこれに次いで仏教の盛んな地域に数えられている。[註2] 広東、雲南方面に教線が延びたのがこの時代の目立った特色で、これらの地域には唐、五代に造立された仏寺も少くないが、元代漢人の南遷に伴って、支那仏教が定着し、明代に寺刹も創建され、[註3] 杭州に次いで仏教が栄えた地域となった事が注目を惹く。主として雞足山、水目山、昆明等が拠点となっている。以下『新続高僧伝』を手掛りとして明代仏教教団の動きを探ってみよう。

この書は北京法源寺の道楷が、唐、宋高僧伝につぐ僧伝の編纂を発願し、惟澄がこれを助け、さらに喩謙昧菴居士がその業を継承し一九一九年から二三年に至る五年の歳月を費して完成したものである。記述内容に、例えば班的答と具生とを別人として挙げる如き誤りが指摘され、また当然収録すべき玉林通琇や超盛等の伝を逸しているのは妥当を欠くと評せられ、[註4] 多少難点を含むものではあるが、宋から清末に至る高僧の伝を網羅したものとして、他に類例がなく、また宗派の別によらず、師僧の事業の方面によって十科を樹て分類している点、通仏教的性格の顕著な明清仏教の叙述形式としては、実情に則した適切なものであり、分量の面でも甚だしく広翰に過ぎず、手頃であるから、今はしばらく、これを教団の概況を知る資料として使用したい。ここにいう十科とは、[註5] 経論の翻訳を主とする訳経、義理の構造の解釈である義解、禅定修学を主とする習禅、戒律に通暁、行足していることを表わす明律。仏法の護持を最大関心事とする護法、霊妙不可思議な奇瑞を感得する霊威、諷続読誦を専らにし、浄修の行を受持する浄読、寺刹を復

興し、世福をはかる興福、種々とり混ぜて書き記した雑識の十部門から成るものである。

明・清時代はともにほぼ三百年であるから、便宜上機械的に百年ごとに区切り、それを一・二・三と三期[註6]に分け生歿年を中心にこれに配当し部門別、省別、時期別に高僧の分布を表記することにする。該書に年時を記さないものは時期不詳の部に編入した。

註1 『夢遊全集』に「時当末運法門寥落」巻二七、三〇一a、「明二百年来禅道寥々伝灯闕典」巻一四、一九八d、とあり。続蔵一―二、三二・三。三二―二。

註2 前掲『東亜仏教史』三九二頁。

註3 南条・高楠述、沢井編『仏領印度支那』一〇〇―一〇五頁。

註4 『仏書解説大辞典』六、二四三頁。また主たる住持の地の表記についても、例えば元来は福州鼓山として挙げているが、博山を本拠とする方が適切である。この点についても基準が明かでない。

註5 梁高僧伝は訳経上・中・下、義解一～五篇、神異上・下、習禅、亡身の構成となっており、唐高僧伝は、訳経一～四篇、義解一～十一篇、習禅一～六、余、明律上・中・下、余、感通上・中・下、遺身、読誦、興福、雑科の十科に分け、宋高僧伝もこれに倣っているが、序文の後に科名を一括して挙げ、

それぞれに内容解説を附している。大正蔵五〇、史伝部二、七一〇・上。『新続高僧伝』の記述に則していえば、

一、訳経、西竺の遺経なお未だ尽く出さざるあり、能く訳するも得て未だ刊せざるの典、残編、賸義尤も宝貴に当る。

二、義解、文を尋ねて義を見、豁然として悟解す。或いは経の訓を釈し、或いは語録を撰し、理を説くこと精深なるは方にこの選に当る。

三、習禅、清修枯坐、万念倶に忘ず、幽山窮巌は古仏の宅る所、閉関深く造る方に之に当つるに足る。

四、明律、戒徳を精厳にし、法を説き、衆を警め、虚妄を勘破し、律訓を著わすことある者、均しくこの科に入る。

五、護法、（梁にはこの目なし、唐宋増改す）外道は相い賊う、功は捍衛に深く、議論は縦横に、弁者として当るなく、或いは身を以て殉ず、尤も解すること難しとなす。

六、霊感、（梁には神異、唐宋均しく感通という）至誠の積む所、感じて遂に理に通じ、自然世俗測ること罕なるも、必ず験すべきあり。無くとも或いは爽なり。

七、遺身、（梁には忘身という。唐宋これに改む）躯を捐て、明道を志すを見る。相い期して此の穢濁を捨て、我が金剛の心を廻らし、疾忿なし、方にこれを称するに足る。

八、浄読、（梁に誦経あり、また経師あり、唐宋改めて誦読となす、今ならびにこの科に入れ、浄を以て帰となす。）

誦経諷仏これを浄修という。功果円かなる時、西土遥かなるに非ず。念念目持、庶くは真如を証せんことを。

九、興福、名勝古刹、歳久しうして荒落す、苦志重修し、あるいは蘭若を啓き、独り自ら剏構す。厥の功もっとも偉なり。

十、雑識、（梁に唱導と曰い、唐に雑科と曰い、宋には雑科声徳という。）声音文字は仏法を顕わすに足る。古より以来この科を廃せず、戒徳愆うなきは斯の選に愧じず。

となる。

註6　明朝は事実上、一六四四年で終ったとみられるが、百年を単位として区切った都合上、明室が僅かに余喘を保った一六六一年までを含め、三期としたので、普通いう前・中・後期と一致しない。この区分も年代の立て方が人によってまちまちであるということもあるので、機械的に分けることにした。この区切りを境に、前後に跨る場合、原則として四捨五入して配分した。

なお明代では宣徳（一四二六）から隆慶（一五六七）に至る百余年間が、仏教の最も衰微した時期とみられている。その事は下掲の表の僧数にも反映している。

新続高僧伝所収僧名明代省・時期別一覧

省別＼時期	第一期 1368～1467	第二期 1468～1567	第三期 1568～1661
浙江省	臨安浄慈宗泐	余杭浄慈大壑	婺州智者普仁
	余杭上天竺弘道	杭州東天目如空	余杭徑山徳祥
	余杭浄慈明徳	杭州浄慈智源	余杭昭慶大恵
	余杭浄慈道聯		余杭徑山円澄
	余杭竜井普智		余杭徑山真可
	会稽宝相懐謂		余杭徑山円信
	処州福林智度		余杭理安如嵩
	銭塘霊隠大訢		塘棲大善伝如
	銭塘浄慈智順		嘉興東禅明得
	銭塘霊隠原瀞		天台慈雲真清
	杭州浄慈智及		徑山化城法鎧
	杭州昭慶楑原		四明天童円悟
	杭州霊隠補良		四明天童通賢
	杭州霊隠忻悟		四明天童通容
	杭州浄慈宗妙		四明天童道忞
	杭州浄慈師頤		四明清涼僧茂
	四明宝陀恵照		会稽華厳志若
	四明阿育王崇裕		会稽明証

浙江省	四明天童祖渕		永嘉西岑芝峰性静
	台州国清曇靈		銭塘浄慈正嵒
	天台証道祖鎧（元）		銭塘竜井如清
	衢州福恵世愚		杭州雲棲袾宏
	寧海報恩自縁		杭州上天竺万霊
	時期不詳		
	余杭上天竺永顧	余杭土橋円瓏	余杭上天竺恵日
	余杭演福如玘	余杭集慶士璋	杭州天目印原
	杭州霊隠徳明	杭州聖水寂心	杭州浄慈道富
	杭州仏恵円果	杭州資福広徹	杭州霊隠如通
	杭州雲居聖水照兼	杭州雲居聖水徳拠	寧波普陀行丕
	温州羅漢正智	富陽栗塢康斎	嘉興天寧僧秀
	海塩福臻梵琦	湖州報恩円修	
江蘇省	金陵鐘山西天智光	金陵大報恩永寧	金陵天隆如馨
	金陵鐘山班的答	攝山棲霞法会	金陵宝華洪恩
	金陵霊谷道謙		金陵宝華寂光
	金陵天界恵曇		金陵棲霞性潔
	金陵天界懐信		上海安国紹宗
	金陵天界夷簡		姑蘇華山祖住
	松江興聖原争真		京口浄業古松

江蘇省	紹興宝林大同		潤州金山洪譬
	姑蘇延慶善啓		
	宜興竜池永寧（元）		
	華亭興聖原真		
	江寧華厳仏妙		
	虎邱雲巌至仁		
	金陵霊谷能義	金陵霊谷三峰	金陵霊谷仲義
	金陵極楽性相	金陵宝華普照	金陵法蔵杜聖
	金陵天界力金	応天棲霞真節	潤州焦山普済妙福
	潤州金山霊観定清	嘉定浄慈祖儞	陽山大慈善学
	松江普照居敬	虎邱雲巌文琇	姑蘇報国性袛
	広陵福田性福	上海施水善信	
雲南省	大理蕩山無極	帰化善堅	
	雞足大覚尽玄	雞足大覚真利	雞足大覚周理
	雞足大覚円彩	雞足放光釈禅	雞足西来如唐
	雞足依衣寂観	雞南聖峰徳住	竹林密行
	水目宝華洪如	曲靖真理鏡中	曲靖玉竜海量
	昆明大徳道源	昆明妙湛悟本	昆明寺広恵
	笻竹円旭	竜幡法鎧	通海東華山恵心
	洱海般若真語	石宝山宝岩居思明	

河北省		湖北省		湖南省
	燕京竜泉徳始 燕京万福浄倫 金台永寿思敏	当陽玉泉広鎮	荊州明秀 宜都顯明道慶 沙市白斎道通	衡山開元道超
燕京吉祥明信 燕京大慈覚濬 燕都普済自成 房山上方普賢銀円	燕原法華徳聚 燕都普慶法開 薊州林亭朗然	荊州普仰満秀（北宗禅）	荊州天皇寒灰 宜都広済徹夫 遠安寿隆普義	
羊山秀峰明竜 金台竜華広禎 薊州浄業至明 燕都古懸忠永海 燕都広済性美 燕京資福鎮端 燕都二聖僧清 燕都慈恵明玉	燕原広済普恵 燕都戒台道孚 通州静嘉本明	荊南普仰正誨	襄陽承天覚成 当陽玉泉紫柴庵法瑄	宝慶五台観衡 夾山本豫 寧郷同慶如学 南嶽上封法祥 湘郷荊紫無学

湖南省	福建省		山西省		江西省	
衡山南嶽開縁 長沙柏林明星	泉州開元正映 福州鼓山湧泉宗繁	鼓山白雲洞悟宗	五台寿安具生	隰州石室円鏡 五台顯通釈迦也失 五台顯通葛里麻		九江盧山法禅
衡山南台無礙 衡陽法輪石隱		泉州開元東塔正派		代州七仏道相 五台普済浄澄 五台聖光福登		遠安福河普亮
潭州三角如幻	漳州報敂亘信 鼓山湧泉寺大蟻 福州鼓山湧泉智闇 福州雪峰超弘		五台清涼老蔵 清涼竹林鎮澄 雲中普興義玄	五台霊樹宝金 五台清涼承芳 太原永明遠清	廬山法雲徳清 廬山雲中法忠 新城寿昌恵経	

安徽省	清遠蓮城清宣	銅陵竜興空源	青陽九華性蓮 青陽九華東巌海出 皖中浮山華厳本智
四川省	嶽湄万世 黄竜観止	嶽湄普賢恵宗	梓潼廻竜恵慈
広西省	桂林寿仏応能		
山東省	泰山竹林満空		会城斗先洪上
広東省	端州慶雲道邱		
河南省			懐慶竜岡如遷
住持の地不詳	照庵啓原尼 崇恩演福顕示 鳳皇山聖果子敬 香林祖能 了心善縁		円鼎(附)無台(附) 玉光、参霊、真全 月潭、伝記、太守 如然、雲峰、居溟 金童廟僧、如会 道枢、具宗、常鎮 黄山慈光惟安
住持地・年次不詳	学蘊知空、剣英、際定、不二、真一、紹宗、広圖、治牧、宗深、海祥、真祥、南海檳榔嶼極楽復余、曼荼羅、帰化尼、香火、澍蓀、周続、恵鑑、儒施、真懐、祖香、静明、幽渓、高明伝灯、新安黄山擲鉢広寄、照御、会城大徳寺如意、会城大徳寺海宝、大真、真澄、円省、定堂、南嵩、徹容、黄山雲嶺如本、妙光恵、慎庵祥、良珍、来秀、性寿三宗、万富、覚義、波羅、死人、天祥、大錯、訾秀、徳一、徳言		

新続高僧伝所収僧名清代省・時期別一覧

省別 ╲ 時期	第一期 1618〜1717	第二期 1718〜1817	第三期 1818〜1911
江蘇省	潤州金山通問	潤州金山江天実徹	潤州金山江天大定
	虎邱雲巌弘儲	潤州焦山福毅	潤川焦山定恵大須
	江寧古林性樸	江寧霊谷緒守	潤州焦山定恵常照
	姑蘇師林書秀	江寧霊谷衍紹	潤州焦山定恵修敏
	姑蘇真諦書浄	金陵霊谷彌垠	潤川焦山悟信
	宝華恵居真義	金陵慈応心観	丹徒竹林悟先
	宝華隆昌実球	金陵鷲峰正真	江寧吉林本修
	宝華隆昌常松	宝華隆昌福聚	江寧古林昌心
	維陽石墖学倫	維陽石墖通和	金陵慈応通明
	宿遷極楽興祥	淮安観音源長	金陵毘盧顯文
	江寧古林海華	淮安誕登万清	金陵霊谷称修

江蘇省

江寧華山海潤
江寧古林寂鼎
江寧天界半峰成時
江寧古林普璠
虞山普仁行策
虎邱雲巖自扃
潤州金山江天超楽
潤州焦山智先
金陵大報恩普見
准安聞思真賢
広陵五台律院書禎
江陰円覚宗深
鎮海瑞巌宗輝

宿遷極楽来照
宿遷極楽徳明
宿遷寿聖福住
宿遷寿聖祥珠
楊州高旻際聖
楊州恵因実長
姑蘇南禅仏度
姑蘇治平正言
毘陵永寧学潜
儀徴隆覚普悦
雲間西禅悟虔
虞山福興海聖
江南金山了庵
丹徒焦山定恵清恒
金陵霊谷宗運
准安聞思常智
晋陵天寧戒潤
鎮江良邃自明

宝華山隆昌読体
宝華山隆昌徳基
維陽福縁日照
常州天寧清鎔
常州天寧常恵
宿遷極楽性澄
高郵観音松園
句容赤山本心
上海玉仙戒然
潤州焦山覚源
焦山定恵了然
准安普応溥範
准陰聞思溥訓
儀徴隆覚洪建
維陽智珠性賢

四明天童本晢
四明天童超静

四明河育王山持荃
鄮山阿育王実賢

楽清日鶴華山
楽清浄済機溥

浙江省

四明天童通問
四明天童通賢
四明天童通容
四明天童道忞
四明天童本画
四明天童本僊
四明大梅保福行巘
杭州上天竺方誌
杭州理安行昱
杭州理安行悦
杭州理安行珍
杭州理安行果
杭州理安超格
杭州理安性音
杭州雲林原志
杭州昭慶書玉
杭州霊隠弘礼
杭州霊隠性証
銭塘浄慈正嵒
余杭浄慈可授
孤嶼江心本瑩

杭州理安明鼎
杭州理安明義
杭州理安実月
杭州雲林徳元
杭州雲林義果
杭州雲林悟森
杭州文殊道徴
杭州東園徳寧律浄
銭塘浄慈明中
銭塘祇園聞言
烏程梵音通授
呉山接引広志
天台国清道宗
天台国清達珍
天目禅原実定
海寧護国千一
海寧延恩諦勇
嘉禾覚海達純
嘉興精厳灝融縁

東天目昭明頓覚

浙江省		湖南省	
瑞安仙巌超志 諸曁大雄大勍 台州大慈霊眷 臨安迎恩浄極	四明天童敬安 杭州大椿道証 杭州浄慈昭幢 孤嶼江心通榛	寧郷密印正明 湘陰神鼎行沢 長沙万寿智檀 衡陽万寿行泰	衡陽法輪淡遠 衡州中正離塵 南嶽暁霞文惺
	杭州昭慶果証 杭州孤舟実裕 天台国清小有 盤山青溝智朴	寧郷密印濬明 長沙渤潭衍義 長沙華林文楷	衡陽培元無漏 南嶽祝聖斎子 南嶽毘盧広済大成
	杭州雲林止安 杭州雲居聖水訹湛 仁和艮山崇福超海 海寧安国大涵	衡陽仁瑞無来 長沙麓山芳圃 長沙嶽鹿万寿映冰 長沙定湘続成 善化護国恵円 宝慶點石仁里 衢州西禅常析 衡山暁霞続柱 新化四願慈源 東安麒麟無彼	衡陽太和果法 南嶽石浪法智 長沙鉄仙無跡

湖北省		河北省
公安観音超乗 公安玉泉海福 公安報恩済亮 荊南天斉明智 荊州 無 名 荊州天王恵海 当陽東禅性関 当陽玉泉道巌 漢陽棲賢行敬 枝江六合行洪 青林竜安超況	峡州石塔戒隠 安陸西来秀野 嘉魚西安弘照	
宜昌慈雲惺参 荊州資聖性空 當陽玉泉恵証	当陽玉泉円惺 荊州二神悟誠 公安今古如恵	燕京吉洋明信 燕京大慈覚滀 燕都普済自成 房山上方普賢銀円
荊州如来朗明 江陵章華松青 漢陽円照体海 当陽玉泉隆昇	宜都青林道隆 潙陽甘露悟丘	羊山秀峰明竜 金台竜華広禎 燕都古愍忠永海 燕都二聖僧清 燕都広済性美 燕都慈南明玉 燕都資福鎮端 薊州浄業至明

河北省		
金台永寿思敏	通州静嘉本明	薊州林亭朗然
燕都竜泉徳始	燕都普慶法聞	燕都戒台道孚
燕京法華徳聚	燕京広済普恵	燕京万福浄倫

四川省		
蜀北給孤本襄	西蜀広行自光	新都宝光覚賢
雙桂福国印水	雙桂福国真旻	成都宝光宗質
雙桂福国海明	成都昭覚了元	成都昭覚通朗
成都昭覚通酔	成都昭覚守仁	梓潼永利円鏡
四川昭覚離指	什邡羅漢達徹	
峨眉毘盧克誠	峨眉臥雲源通	黔中永祥宗興
新都宝光宗興	銅陵寿陵悟賢	成都昭覚照常

福建省		
漳州馴虎超頂		
漳州南山報敏超極		
竜渓円照行森		
黄檗隆琦		
黄檗性願		
福州雪峰照拙		
鼓山湧泉元賢		
鼓山湧泉道霈		
怡山棲雲超乗	漳州開元定世	漳州南山万善無疑
福州雪峰海印		

雲南省		
水目宝華普行		水目宝華祖真
水目宝華通荷		
富民西華恵宗		
昆明勝因徳潤		
鹿渓浄楽性香		
雞足蘭陀道足		
雞足断際定寂		
大理雨珠弘宗	昆明妙湛寺読徹	

安徽省		
青陽華厳智旭		九華百歳宝悟
徽州常楽昭広		
清涼音可	徽松山寂融	

広東省		
		南海檳榔嶼極楽地華
大埔南安寺幽明		

山西省		
五台清涼老蔵		五台清涼源修

山東省		
泰山普照元玉		

広西省		

河南省	
江西省	

住持寺名不詳

方孝、性蔵、(知)止道瑞、
本実、洪中、済舟、
本秀、懋功勗、仏寃綱
渓声円、趙徹、恵較、
智広、際雲、溥璐
福溶、恒転、万縁、
指南、寂舜、性遇、
法華学者、振寰、印正、
超烱、性融三昧、悟禎、
昌珩、黄山雲嶺普信、
智幻

徳琳、宝勝、天恵徹
了貞、妙祥瑞、通静、
明宏、明徳、実円、
徳峻、梅松、法真、
仏安、世璞、徹迷、
弘礼、聖義、達聞、
大平白雀雨花聖通、
聞竹上志、
棲水大善篆玉、
宝林鑑、
品高峰、体純、
研庵、法文

浄鑒、続果、観心
能高、崇池、如月
清法、一心、続乗
心有、開恵、開蓮
月天寃、慈、肇円
円参、本立、清福
海瑞、梅潤滋、香山
仁潔
光運、精一

住持地・年次・不詳

林谷、洪舒、徳曙、三尹、絶相、東瓜、妙修、静清、勝普陀、楚石、
善聯、道仁、行勉、戒顯、済玹、普灼、妙庵、真印、一揆、成鷲、
道乾性鎧、大観道自、流本、徳鏡、行載、之載、通渕、実懿、元玢、
文暢、真空、智曇、玄義、徳輝

表1 新続高僧伝所収諸師部門・時代別一覧

科／時代	正・附別	宋	南宋	遼	金	元	明	清	計
訳経	正伝	5	／	／	／	5	2	2	14
	附見	10				6	2	0	18
義解	正伝	14	7	3	／	22	42	36	124
	附見	1	3	4		15	45	31	99
習禅	正伝	21	55	／	7	20	42	45	190
	附見	20	24		6	9	24	38	121
明律	正伝	3	4	1	1	1	29	48	87
	附見	1	5	1	0	2	5	16	30
護法	正伝	3	／	／	／	3	6	11	23
	附見	0				37	4	12	53
霊威	正伝	6	／	／	1	4	14	16	41
	附見	0			0	1	10	7	18
遺身	正伝	／	2	／	／	1	6	11	20
	附見		0			0	4	9	13

	浄経 正伝	浄経 附見	興福 正伝	興福 附見	雑識 正伝	雑識 附見	
	15	7	3	3	11	6	129
	15	13	8	9	3	1	149
	1	1	／		／		11
	1	1	3	5	／		25
	4	5	10	10	6	2	163
	20	25	55	43	15	19	412
	47	45	52	40	37	44	547
	103	97	131	110	72	72	合計 1436

表2 同上各部門時代別順位

部門＼順位	1	2	3	4	5	6	7
訳経	宋	元	明	清			
義解	明	清	元	宋	南宋	遼	
習禅	清	南宋	明	宋	元	金	
明律	清	明	南宋	宋	元	遼	金
護法	元	清	明	宋			
霊威	明	清	宋	元	金		
遺身	清	明	南宋	元			
浄読	清	明	南宋	宋	元	遼	金
興福	明	清	元	南宋	金	宋	
雑識	清	明	宋	元	南宋		

表3 同上省別・時期別計数

（明）

省名	一期	二期	三期	時期不詳	計
浙江	23	2	23	20	68
江蘇	13	2	8	17	40
雲南	1	1		20	22
河北		4	8	9	21
湖北	1	1	1	8	11
湖南	1		5	5	11
山西	1		3	6	10
福建	2		4	2	8
江西			3	2	5
安徽			3	2	5
山東	1		1		2
広西	1				1
広東	1				1
河南			1		1
不詳住地	5		17	6	28

（清）

省名	一期	二期	三期	時期不詳	計
江蘇	17	23	20	19	79
浙江	27	21	3	12	63
湖南	4	3	10	9	26
湖北	11	3	4	8	26
河北		4	8	9	21
四川	5	5	4	6	20
福建	8			4	12
雲南	7		1	2	10
安徽	2		1	2	5
広東			1	1	2
山西	1		1		2
山東				1	1
不詳住地	30	26	23	34	113

『新続高僧伝』に収録する僧伝の正見・附伝を合した数を見ると、（表一）まず、明・清ともに、興福が他の部門に比して圧倒的に多くなっていることに気づくであろう。これは先行する時代の末年における戦火による寺刹の荒廃とも係わりがあろうが、前述したように、いわば伽藍仏教的な性格を表わすものとみられる。明代、義解が第一位を占めていることは講経の盛行を裏書きするものとみられるが、禅定の修学の風も再び起こり、明律部門が漸増した。末期に古林、千華派の復興があり、禅においても戒学が重視されているところから国家の要請に合致した方向において教団粛清への動きを読みとることができる。また清・明に至って遺身が急増しているのは、内外情勢の緊張に伴う危機意識をある程度反映しているとみられる。その他清代には浄読、習禅、興福、雑識ともに数の上では増加をみ、一、二位を占めている。『新続高僧伝』が明清時代に重点を置いて編集されたということもあろうが、全体としてこの時代に活躍した師僧は数の上では他を遙かに引離している。（表の集計参照）因みに各部門別の順位は、

一、明代　1興福、2義解、3習禅、4浄読、5雑識・明律、6霊威、7遺身・護法、8訳経

二、清代　1浄読・興福、2習禅、3雑識、4義解、5明律、6護法・霊威、7遺身、8訳経

となっている。

省別にみると、表3で明かなように、浙江、江蘇両省に集中している。ただ浙江は清末に急激に減少していることが注目され、四川仏教の登場など明・清の間にも変遷、推移が認められる。以上、部門、時期、地域別に明・清仏教の動向を大観したが、他日改めて個別的な調査考究を試みたい。

〔昭和五十一年度文部省科学研究費（一般研究・D）による研究成果の一部〕